

高校生と島民の交流で周防大島町の良さを再確認する ～内向きの戦略で島民の意識改革を行う～



山口県周防大島町 吉國 歩

1. はじめに

全国各地で「人口減少時代」を迎え、出生数より死亡数が上回る人口の「自然減」と、都市部への人口流出という人口の「社会減」の課題がある。また、それに伴い、少子高齢化、後継者不足と様々な問題が表面化している。

周防大島町でも、自然減・社会減を合わせると、毎年約400人以上人口が減っている。これらを食い止めるために、周防大島町では平成16年の合併時にまず、交流人口を増やし、そこから定住人口を増やそうと交流人口100万人を目指して様々な取り組みを行ってきた。平成28年には目標である交流人口100万人を達成するものの、未だ人口減は止まることなく続いている。

そこで、私は外向きの対策から内向きの対策に考え方を転換することにより、周防大島町民が、島に対して誇りや愛着を持つことで、たとえ都市部へ行った後も帰ってきてくれる町に、そして外に行ったとしてもそこで周防大島町の良さを発信してもらえる人になってほしいと思う。

そのためには、今いる子どもたちに対して、住んでいる地域に誇りを持てるような地域づくりを進めていくことが大切である。次の10年、20年を創っていく若い人たちが、「このまちが好きだ」「このまちに暮らしたいな」と感じてほしい、周防大島町に暮らす人はずっと住み続けたいと思うようになり、その雰囲気外部に伝播して周防大島町に移住する人が増えることを目指したい。

そこで、現在周防大島町で交流人口増加のために取り組んでいることを確認し、周防大島町にある島唯一の県立高等学校「周防大島高校」に着目し、現在、周防大島高校で取り組んでいる「地域創生」をまとめ、地域に誇りや愛着を持てるような取り組みをしている高校と比較・検証することで、愛着形成の地域づくりを考えたい。

「現場で多様な人との交流、体験、実践」からの学習を導入し、1つの専門性ではなく、全体観やつながり・関係性を学ぶことを主眼とし、創造力・主体性・コミュニケーション能力など地域社会で活躍するための社会人基礎力を養うカリキュラムを柱にしたキャ

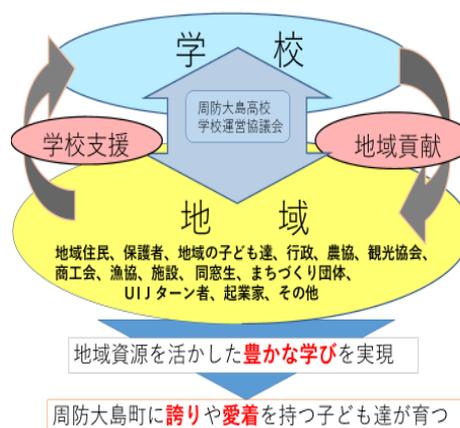


図 1：周防大島高校と地域の目指すべき関係性

リア教育を行う。また、卒業して町外に出て行った卒業生との繋がりを持ち続けるため、イベントブースを開設し卒業生に発信することで、定期的に足を運んでもらう機会づくりを行いたいと考える。

2. 周防大島町における交流人口の現状と課題

(1) 周防大島町の概要と人口動態

周防大島町は、山口県東南部の瀬戸内海に位置し、北は広島県、南は愛媛県の島嶼部に隣接しており淡路島、小豆島に次ぐ瀬戸内海で3番目に大きな島である。大島瀬戸を渡る大島大橋によって本土と結ばれており、周囲には5つの有人島、25の無人島がある。全域が瀬戸内海国立公園に指定され、山頂からの瀬戸内海をはじめとする、美しい景色や自然に恵まれており、気候は、四季を通じて比較的温暖で、平均気温も15度を超えており、雨が少なく、冬でも晴天の日が多く降雪・積雪もほとんどないため、特に高齢者にとって暮らしやすい地域となっている。

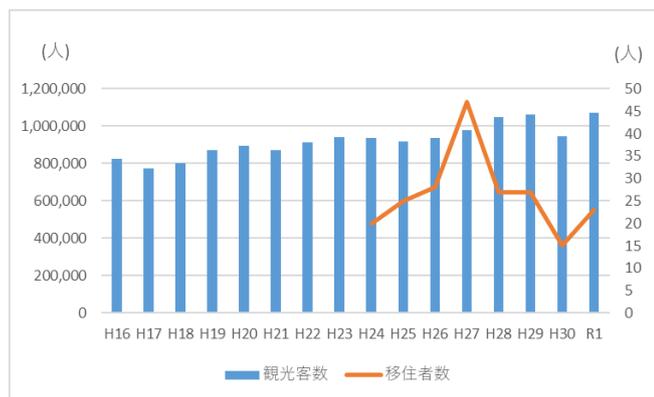
人口動態でみると、過疎化、高齢化が進み、終戦後6万人を超えていた人口も、現在では1万5千人ほどで、周防大島町の人口の増減を見てみると、毎年約400人減っている。

年	人口	出生 +	死亡 -	転入 +	転出 -	自然増減	社会増減	総人口増減
R1年	15,775	39	450	425	559	△ 411	△ 134	△ 545
30年	16,756	56	450	518	560	△ 394	△ 42	△ 436
29年	17,237	59	477	489	552	△ 418	△ 63	△ 481
28年	17,649	45	445	534	546	△ 400	△ 12	△ 412
27年	18,078	58	400	505	592	△ 342	△ 87	△ 429
26年	18,536	73	451	553	633	△ 378	△ 80	△ 458
25年	18,950	62	499	631	608	△ 437	23	△ 414
24年	19,239	70	448	577	558	△ 378	19	△ 359
23年	19,677	69	503	588	592	△ 434	△ 4	△ 438
22年	20,085	75	469	573	587	△ 394	△ 14	△ 408
21年	20,446	77	416	619	641	△ 339	△ 22	△ 361
20年	20,950	65	484	592	677	△ 419	△ 85	△ 504

(2) 周防大島町の観光人口

周防大島町はみかんの島として知られており、農業生産の多くはみかんで占められている。近年農業従事者の高齢化、後継者不足などの問題により生産者が減少するなど多くの課題を抱えている。水産業は、瀬戸内海沿岸を漁場とする沿岸漁業が中心ではあるが、農業と同様、従事者の高齢化、後継者不足、漁獲量の低迷が課題となっている。農業漁業の課題がある中で、力を入れているのが観光である。固有の財産である豊かな自然や歴史を活用して平成16年に「観光交流人口100万人」を目標に交流人口の拡大による地域活力の創出に努め、「交流から定住へ」を合言葉に、交流人口増加に向けて力を注いできた。平成28年には目標としていた100万人を達成した。交流人口は達成したものの、移住者数は伸び悩んでいるのが現状である。

表 1：周防大島町の人口動態



グラフ 1：観光客数と移住者数

では、どのような形で交流人口 100 万人を達成したかを次に述べ、今後の展開について考える。

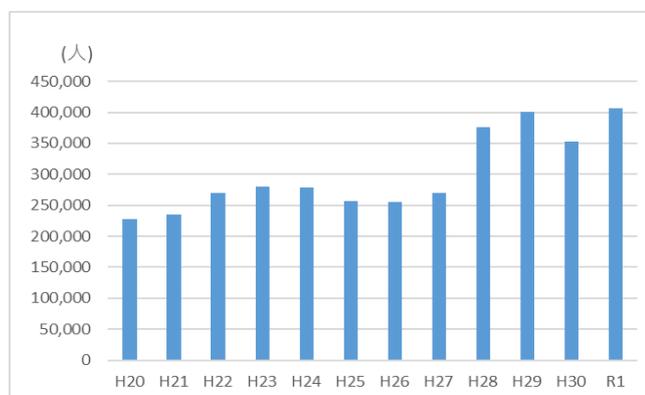
3. 周防大島町の交流人口 100 万人を目指した取り組み

周防大島町の過去のデータを分析してみると、住民とかかわりの深いものが交流人口 100 万人を達成するにあたり欠かせないことが分かった。ここでは、住民との関りが深い 3 つの事例を紹介したい。

(1) 道の駅サザンセットとうわ (チャレンジショップ)

瀬戸内海に浮かぶ周防大島町の道の駅には地元生産直売コーナーがあり、近隣農家の採れたて野菜や周防大島の伝統食を販売しており、観光客だけでなく地元住民からも愛されている場所である。

平成 23 年からは、チャレンジショップ事業を行い、あらたに起業を目指す島内在住者に、道の駅での商業活動へ参入する機会を与え、観光拠点地の更なる交流とにぎわいの場をつくっている。出店数は 5 店舗で、新たに起業を目指す人を支援するため、月額 1 万円という安価な賃料で 3 年間 (最長 6 年間) 店舗を貸し出し、集客力のある道の駅で起業

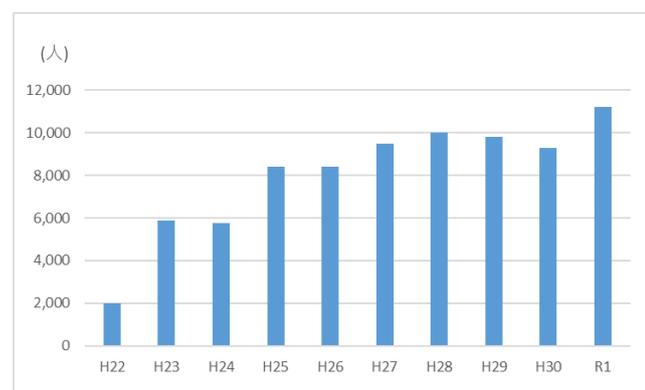


グラフ 2 : 道の駅の観光客数

に向けたノウハウを習得することが可能となっている。利用者の中には町内に自分の店をオープンさせる人も出てきおり、チャレンジショップは、観光拠点の更なる交流とにぎわいの場にもなっている。

(2) サタフラ

サタフラとはサタデーフラダンスのことで、夏休みの期間中の、毎週土曜日の昼と夜に、4 つのレギュラー会場で、デイステージとナイトステージが開催される。このイベントは、平成 20 年に始まった。きっかけは、ハワイと周防大島町の繋がりを外部に発信することと、ハワイ州カウアイ島と姉妹島を結んでいてフラダンスの文化が昔から根付いていることから、保



グラフ 3 : サタフラ観光客数

育園児から高校生、お年寄り、男性チームなど老若男女関係なく、また年齢も幅広い島民がフラダンスを練習していたものの、披露の場がなかったため、サタフラを企画した。最初のサタフラは、参加チーム 20 チームほどで、お客も少なくナイトステージの会場である宿泊

施設の宿泊客に見てもらおうようお願いをしていたが、徐々に客数も増えて、今では踊り手も 140 チームの申し込みがあり、開始前から客席に観客が着席するほどの盛り上がりを見せている。

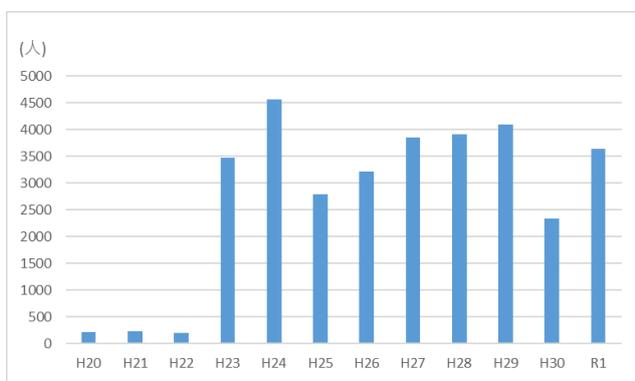
今ではイベント時期になると、ホテルは満室になり、予約が取れない状況で、経済効果も上がっている。

また、サタフラをきっかけに周防大島高校の生徒は映画「フラガール」で有名になった、福島県いわき市にあるスパリゾートハワイアンズというアミューズメント施設で行われる「フラダンス甲子園」にも出場を果たした。さらに、移住者がハワイをモチーフにしたアパレル、T シャツ、雑貨、ジュエリーなどを販売しており島全体で、瀬戸内のハワイ周防大島を盛り上げている。

(3) 体験型教育旅行

周防大島町では、「外から来る人」「島に根付く人」を呼ぶために、平成 20 年から体験型教育旅行を行っている。

現在は関西圏の中学校と首都圏の高校の修学旅行生を中心に、年間 20 校～30 校、計 3,000～4,000 名あまりを受け入れている。この体験型教育旅行における民泊では、民家に 3～5 名のグループで宿泊（ホームステイ）することによ



グラフ 4：体験型教育旅行による来町者数

り、宿泊先の農業や漁業などの家業を体験するだけではなく、素朴で温かい人情のある島暮らしを体験することができる。民泊の受け入れには手間も時間もかかるが、本物の体験から得る新鮮な感動と貴重な体験を都会の子ども達に与えるばかりではなく、高齢者の多い受け入れ家庭にとっても生きがいとなっている。また、子ども達にとっても体験型教育旅行での体験は忘れがたいものとなっているようで、大学生や社会人となり、友人を誘い再び周防大島町を訪れてくれるということもある。

実際に、体験型教育旅行を行った神奈川県の子が、東日本大震災後、夏休み期間に計画停電になり部活動ができなくなったことから、受入でお世話になった家族に連絡をして、夜行バスを使い約 1 週間周防大島町に遊びに来たという。また、違う生徒は体験型教育旅行を体験して、周防大島町で働きたいと関東の高校から山口大学教育学部に進学し、実習は周防大島町の中学校を選んで実習期間中は体験型教育旅行でお世話になった家から通ったという。その他にも、田舎だから味わえる体験が出来たと家で話をする子どもたちの姿をみて、その親が興味を持ち、家族で周防大島町に遊びに来てくれるケースも多い。

以上のように、住民との関わりが深いものが周防大島町「観光交流人口 100 万人」に大きく貢献しており、また、交流人口から関係人口へと繋がっている。

4. 島根県立隠岐島前高校の先発事例

島前地域では、この地域唯一である隠岐島前高校が生徒の減少により廃校の危機を迎え

ていた。高校がなくなると、地域から高校生がいなくなるだけでなく、働き盛りの親たちが家族ごと島を出てしまい、地域の少子高齢化がさらに加速し、伝統行事や第一次産業は後継者不足で衰退、地域の活気は失われ、やがて島に住む人がいなくなる。そんな暗い未来を変えようと、島前3町村が連携し、生徒が行きたくなる・保護者が行かせたくなる・地域が活かしたくなる「魅力的で持続可能な学校と地域をつくる」ことをビジョンとし、島前高校魅力化プロジェクトを立ち上げた。

平成20年3月に高校改革の推進母体である「隠岐島前高校の魅力化と永遠の発展の会（魅力化の会）」を高校と島前3町村の町村長、議長、教育長、中学校長らで発足した。そして、高校を存続させることを目的にするのではなく、魅力化した結果として存続もするのだという共通認識のもとで高校と魅力化の会が協働し、この取り組みを魅力化プロジェクトと総称するようになった。

島前高校魅力化プロジェクトでは、島の文化を継承し、地域で新たな事業や産業を創造する「地域のつくり手」を育てることは、島唯一の高校としての責務であると考えられていたが、中学校まで行われていた「ふるさと教育」が、高校においてはほとんど行われていないことが判明した。

そこで、隠岐島前高校では小中学校で行われてきた「ふるさと教育」を更に発展させ、地域に根差したキャリア教育を目指すこととした。「島全体が学校」「地域の人も先生」「地域づくりを通して自分づくりを行う」というコンセプトのもと、「現場で多様な人との交流・体験・実践」からの学習を導入し、1つの専門性ではなく、全体観やつながり・関係性を学ぶことに力を入れた。

また、生徒たちがインターンシップや実際のまちづくり、商品開発などを行うことで、創造力・主体性・コミュニケーション能力など地域社会で活躍するための社会人基礎力を養うカリキュラムを柱とする「地域創造コース」を新設した。

この地域創造コースには、2年次に週3時間行う「地域学」と3年時に週2時間行う「地域地球学」という科目がある。これらの授業は島前地域そのものを教材にした学校設定科目で、生徒それぞれの興味に応じてプロジェクトチームを組み、地域内外の優れたエキスパートの協力を得ながら地域の魅力や課題を探求し、その解決策を立案し、実際に地域で実践・評価・検証・改善を行っていく授業である。その過程を通してコミュニケーション能力や課題発見解決力などを身につけるとともに、自分自身と地域や社会のつながりを学んでいく。

また、これらの授業と平行して行われる「生活ビジネス」という科目では、チームワークやPDCAサイクル、目標設定、計画立案、プロジェクトや話し合いの進め方、振り返り方法などを参加体験型授業で学び、地域学や部活動、学校生活で実際に活用しながら身につけていく構造になっている。こうした魅力ある教育で、全国から意欲ある生徒を募集している。今では、島外からの新入生も多く、島内出身者とは異なる価値観やものの見方を学校や地域に吹き込んでいる。

隠岐島前高校では、高校を中心に島全体で盛り上げようとしている。その結果、いい取り組みが島の外に広まり、島の外から注目をされるようになった。まさに、内向きの戦略

で島を盛り上げている。隠岐島前高校では、産業と一緒に生みだしていく人材を育てることが必要であったため、地域のことを知り、何ができるのか学び考える力を養うことが重要であったことから、地域を知ることから始めるカリキュラムを組んでいる。

隠岐島前高校の取り組みと比較すると、周防大島高校では、生徒が周防大島町の良さを知るためのカリキュラムは多くあるが、限られた人とししか関わりがない。また、情報がうまく発信されていないため周防大島高校で何が行われているのかを住民が知る機会が少ない。何を行っているか分からないため周防大島高校に関心が薄くなってしまうと負の要素が重なっているように感じる。地域ごととして、地域全体で、島唯一の周防大島高校を、生徒が行きたくなる・保護者が行かせたくなる・地域が活かしたくなる「魅力的で持続可能な学校と地域をつくる」ことが重要である。

5. 周防大島高校の取り組み

隠岐島前高校の先発事例から、周防大島町に住んでいる人がまちの良さを知り、誇りや愛着を持つことが外部に繋がり好循環を生み出すことが分かった。そこで、周防大島町にある周防大島高校の学校独自教科である「地域創生」を「地域ごと」として周防大島町全体での関わりを持つことを考えていきたい。

周防大島高校の地域創生の授業は、地域と関りが深い高校にすべく、平成 26 年度に学校設定教科として生まれた。「島・学・人プロジェクト」として、島が好き、学校が好き、そこで生きる人が好きを愛言葉に、豊かな自然に囲まれた周防大島町の魅力を発信する取組や、地域の方々と交流する取組を進めている。この地域創生の授業を取り入れるにあたり、すでに地域創生に取り組んでいた隠岐島前高校も参考にさせてもらい現在の流れができた。

1 年次には、総合的な探求の時間として、周防大島町役場政策企画課長を招き、周防大島町が抱えている課題や豊かな自然や文化、農業、漁業等のもつ魅力について講演を受けたり、周防大島在住の起業家の方による講演を受けたりしている。

また、「海の市」にインターンシップとして参加し、地域に貢献する人材を育てている。

2 年・3 年次には、地域創生の授業があり、「周防大島町の歴史を知る」と題して、あるく・みる・きくのフィールドワークを使い周防大島町で起きた出来事を学んでいる。

また、海の市とのコラボレーションにより、アイデアを募集して試作し、来場者に試食してもらう企画を海の市で行っている。ここで学んだことは、連携型中高一貫教育を推進する、周防大島高校と島内中学校がふるさとに対する誇りや愛着を育むことを目的として開催している「郷土おおしま」で発表している。

また、全学年で、夏休み中の課題として、スマートフォン・携帯電話で風景写真を撮影し島の魅力を再発見・発信する「すおうおおしまキレイな海岸フォトコンテスト」を実施している。これらは、山口県環境生活部「やまぐちのキレイな海岸フォトコンテスト」に応募し、入選実績も多数ある。

このように、既に周防大島高校では島の地域創生のためにたくさんの取り組みを行っている。平成 26 年から導入され、「島・学・人プロジェクト」に 1 年から取り組み卒業した生徒は約 300 人になる。周防大島高校の進路状況は、7 割が進学、3 割が就職をしている。

進学先を見てみると、製造業や建設業、流通を学ぶ学校や製菓やデザインなどを学ぶ専門学校に進学している学生が多数いた。これらは、地域創生の授業の中で商品開発やインターシップなどを通して、ものを創る楽しみを知り考える力を養ったことで、更に深く学びたいと感じた生徒が出てきたのではないかと考えられる。

今までの取り組みで、生徒は地域と連携した体験活動や地域貢献活動によりキャリア意識、社会性、コミュニケーション能力などの成長がみることができた。

また、生徒だけでなく周防大島高校で働く教職員も専門の教科以外の学校設定科目を担当することで交渉力や調整力の向上、教養の広がりなど能力開発につながった。

地域に関しては、「海の市」の発展、文化の維持・振興など「海の市」の活性化に貢献した。

一方で、関わっている場所や協力者を見てみると同じ場所・人で構成されており、協力者や披露する場などのさらなる開拓が必要になってくる。また、情報が町内すべてに発信できていないため全島民に届いていないという課題がある。

そこで、高校生や一部住民だけではなく、地域全体の協力の元で周防大島町の魅力を発信し、様々な人と交流することで、高校生がさらに周防大島町への誇りや愛着を持つことに繋げたい。そして、高校を中心に島全体で盛り上げることで、いい取り組みが島の外に広まり、島の外から注目をされるような仕組みを作りたい。

そのために、周防大島高校学校運営協議会の協力のもとキャリア教育の推進を提案したい。周防大島高校学校運営協議会は平成 28 年に、地域や学校の課題解決を一層進め、将来の地域を支える人材を育成することを目的として山口県が周防大島高校をコミュニティ・スクールに指定したことがきっかけで設置された。この協議会は、1. 学校が提案する学校運営改善方策、地域の学校支援の在り方、学校地域貢献の在り方に関すること 2. 周防大島の活性化に向けて、本校に期待すること、本校ができること 3. 10 年後の本校の姿を描くビジョンの作成に関する内容で、平成 28 年から年に 3 回開催されている。委員は行政・教育委員会・連携中学校・地域人材（観光協会・商工会・J A・漁協・障害者施設・幼稚園）などで運営されており、学校側として P T A 会長や校長が参加する。また、特別委員として生徒会や地域連携教育エリアアドバイザーが参加している。

協議会の設置により、地域の教育活動への支援が広がった。例えば、観光協会とのつながりによる、I ターンの起業家による講演を開催し、起業家から見過ごされてきた地域の資源や人とのつながりを大切にすることや、田舎でしかできない事業を行うことなどの話があり、高校生は、身近な人の話を聞くことで「自分でもできるかもしれない」と意欲の向上に繋げている。また、委員である漁協が管理をしており、周防大島高校と同じ地区にある「海の市」を学習の場として提供し、販売実習や商品開発コンテストの場として活用されて地域の大人との出会いにより生徒の成長に繋げている。

この協議会は「会長が認めるときは、委員以外のものを会議に出席させ、その意見を求めることができる」ことから、U I J ターン者や起業家、町役場の若手職員に参加してもらい、周防大島町の活性化に向けた取り組みを提案したい。

また、協議会を調べるにあたり、協議会と特別委員である地域連携教育エリアアドバイザー

一の関係性が少し薄いように感じた。地域連携教育エリアアドバイザーがもっと関りを持つ機会ができると、周防大島高校の取り組みがさらに広がると感じた。

6. 地域住民と高校生の交流によるキャリア教育の推進

高校生が、地域住民と交流によって、地元へ愛着を感じ、周防大島町の企業や産業を知ることによって、魅力が増し、「ずっと住みたい」「また戻ってきたい」と思えるように4つの企画を提案する。

(1) 合同説明会と一日職場体験（まちを知る）

第1に、高校1年生以上を対象とした町内企業合同説明会と体験学習の実施である。地域の産業について知ってもらうことと合わせて、地域にある産業の魅力に気づいてもらう機会をつくる。具体的には、町内の企業等に協力を依頼して業務内容や仕事と地域の関係性等について説明してもらい、働くことの意義や喜びなどを学んでもらう。また、仕事の内容を実際に体験してもらう「一日体験プログラム」を行政、高校が協議して企画し、体験する機会をつくる。今までは、「海の市」での体験学習はあったものの、それ以外の場所での体験学習がなかったため、海の市から場所を拡大する。参加した高校生には、体験レポートを提出してもらう。

企業側としては、高校生に仕事内容と自社の仕事をPRすることができ、レポートを通じて自社の課題の洗い出しなどが可能になる。行政としても、高校生に地域の産業や仕事を認識してもらうきっかけになると考えられる。

(2) 地元の魅力を発掘する（発掘・宝さがし）

第2に、高校生にとって、地元産業の魅力や可能性を感じてもらうことが重要である。このため、高校1年生及び2年生を対象に、地域資源の魅力がどうしたら伝わるか考えてもらうことで、社会人とは違った目線でプロデュースする機会を設ける。

近年ではツイッターやインスタグラムなどSNSを使って発信される情報により流行が生まれ、それを目指し多くの人が押し寄せる現象が発生している。その多くは周防大島町を訪れる若い世代であり、流行に敏感な高校生にもインフルエンサーのような立場から島の人気が気づかない地域資源を発掘してもらう。

(3) 発掘した物をプロデュース（付加価値をつける）

第3に、働くイメージを持つためには、実際に作ることや実行することが重要であるため、高校2年生以上を対象に、「地元の魅力を発掘する」で提案のあったものの中で実践できそうなことから実践していく。

まず生徒は、提案の中から興味あるものを選択し、グループに分かれ、実現するためにどういうことが必要か考える。

その際に、生徒だけでなく、生産者や企業(協力者)に協力をしてもらい、一緒に提案の実現に向けて試行錯誤する。その中で、必要な技術や専門知識が必要な場合は、協力者と共に協議会に相談する。協議会は、町内業者に協力を仰ぐ等サポートする。

このほか、地元企業に、産業の現状と課題を高校生向けに説明してもらい、テーマに沿って高校生が魅力的だと感じる仕事について、一緒に考える機会を設ける。

そして、商品開発や考えた仕事内容を内部・外部に向けて発信する。町のホームページや広報誌、SNS等様々なところに面白さ・魅力をアピールする。

企業側のメリットとして、高校生ならではのアイデアや新たな発見が期待でき、高校生とのコラボ商品ということで協賛企業のPRや活性化に繋がり、生徒にとっても実際に作る経験と産業の新たな魅力発見や考える力をつけることができると期待される。

また、実際にプロデュースしたものを周防大島町の職員に向けて提案する。職員は、高校生ならではの発想を知ることができ、高校生はプレゼン力をつけることが期待できる。これは、実際平成29年に周防大島高校が考えた6つの政策を、周防大島町の職員に向けて提案したことがある。しかし、残念ながら、この取り組みは継続されていないため、ぜひ復活し継続させたいと考える。また、平成29年の発表時には、町長や副町長、部長級の職員が参加していたが、ここに、若い職員や町議員に参加してもらい、高校生が島のために何を考え取り組もうとしているのかを知る場にしたい。

(4) イベントブースの開設 (売る)

第4に、期間限定のイベントブースを道の駅や海の市に開設し、プロデュースしたものを町民や観光客に発表・販売する。

イベントブース開設を通して、なぜこの商品をプロデュースしようとしたのかという生徒たちの思いを発信し、生徒たちがどのような考えを持っているかを住民や観光客に届ける場にしたい。また、生徒たちには自分たちが開発したものをお客が購入してくれる喜びを感じてもらい、地元をプロデュースした成果が集まることによって、地域課題が解決していく流れを作りたい。

また、地域に愛着を持って卒業した生徒に対し、戻ってくるきっかけを作りになると考える。定期的に足を運んでもらうことでたとえ周防大島町にいなくても、地元をホームグラウンドと思い、地域を訪れることができるようにすることができる。卒業生が、後輩と交流する場にもなり、以前関わった企業とも継続的に交流することで、地元を誇りや愛着を持ち続けることができると考える。

以上4つの取り組みにより、周防大島高校の生徒と周防大島町内の企業に相乗効果が生まれ、地域を愛する生徒たちが育ち、そのまま就職したり、外に出てもそこから周防大島町の良さを発信できる人になったり、いったん外に出てもUターンし周防大島町を支える担い手になり活躍することを期待したい。

6. おわりに

この取り組みは、周防大島町に定着するのではなく周防大島町に誇りや愛着を持ってもらうことが最大の目的である。一度町外に出ていったとしても、生まれ育った地域に誇りや愛着があれば、Uターン者になる可能性が高まり、Iターン者を呼び込む人になる可能性につながる。そのためにも、提案した取り組みを実践してもらい、高校生が周防大島町のことをより深く知ることで、卒業後、周防大島高校で学んだことを持って都会へ行き、都会と周防大島町を比較し改めて周防大島町の良さを実感する。そのためには、周防大島町を知ること、地域住民と関わるのがとても大切である。

現に、私自身も I ターン者（孫ターン者）であり父方と母方のふたつの故郷がある。周防大島町にきて地域の住民と交流するなかで、自分自身が生まれ育った地域と同じように、周防大島町にも「誇り」「愛着」を持つようになった。今回の研修で、周防大島町のことを調べることが生まれ育った地元の良さを再発見することにつながった。今の子ども達、これからの子ども達にも、周防大島町に愛着をもってもらい、そして周防大島町のよいところを全国に発信できる大人になってもらいたい。若い世代の育成こそ、私たちが今やらなければならないと強く感じた。

最後に、本研究をご指導くださった大杉先生、全国地域リーダー養成塾の関係者の皆様、第 32 期大杉ゼミの同志、そして全国地域リーダー養成塾へ快く送り出し、多くのご協力を頂いた周防大島町役場の皆様に心からお礼申し上げます。

参考・引用文献

- ・藻谷浩介(2020)『進化する里山資本主義』ジャパンタイムズ出版
- ・山口県 HP「山口県の宿泊者及び観光客の動向について」観光客動態調査・観光客動態調査
<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a16200/doutai/doutaityousa.html> (2021. 1. 9)
- ・道の駅サザンセトとうわ HP <https://sazan-seto.com/> (2020. 12. 20)
- ・周防大島町 HP 「体験型教育旅行」周防大島町体験型教育旅行
https://www.town.suo-oshima.lg.jp/syokoukankou/taiken_top.html (2020. 12. 20)
- ・隠岐島前高等学校新魅力化構想 <http://miryokuka.dozen.ed.jp/wp/wp-content/uploads/2018/06/miryokuka-kousou.pdf> (2021. 1. 4)
- ・一般財団法人島前ふるさと魅力化財団 HP「魅力化プロジェクトについて」隠岐島前教育魅力化プロジェクト <http://miryokuka.dozen.ed.jp/about/> (2021. 1. 4)
- ・山口県立周防大島高校 HP <http://www.suo-oshima-h.ysn21.jp/index.html> (2020. 12. 29)
- ・山口県立周防大島高等学校校長村上哲朗教諭河田久美「山口県立周防大島高校」コミュニティ・スクールの実践
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/community/suishin/detail/__icsFiles/afieldfile/2018/09/18/1409251_03.pdf (2021. 1. 4)